

うに過ぎた体は、若いときに無理を重ねたせいもあり、もうボロボロになっていた。力士としての限界を感じた信夫山は、ついに引退を決意した。大関への昇進こそ果たせなかったが、技能賞六回、殊勲賞一回、敢闘賞一回という見事な成績を残しての、堂々の引退である。引退した信夫山は、山響親方となった。自分の部屋を持ち、若い力士を育てるのが次の目標だった。しかし、病のためにその目標を達成できないまま、保原町が生んだ努力の力士、信夫山は、昭和五十二年、五十二才で一生を終えたのである。

すもうが行われる国技館では、今でも信夫山をなつかしむファンがいる。

「信夫山の、もろ差しから一気にせめるあのすもうをもう一度見たいものだ。」

「新横綱若乃花を破ったあの一番は、本当に見事だったなあ。」

もろ差しが得意だったことから、「リャンコの信夫山」として親しまれた信夫山の活躍とすもうのうまさは、今もこうして語りつがれている。しかし、そのかげにあったきびしい古い古を知る人は少ないかもしれない。

◇ 大けがをしたり、くじけそうになったりしながらも、信夫山が最後まで努力を続けたのはなぜだと思いますか。

◇ 関脇として引退した信夫山に、あなたはどんな言葉をかけてあげたいと思いますか。